

2020. 7. 26 第四主日礼拝

I コリント 3:10-17 「神の宮の土台と建物」

聖書

10 私は、自分に与えられた神の恵みによって、賢い建築家のように土台を据えました。ほかの人がその上に家を建てるのです。しかし、どのように建てるかは、それぞれが注意しなければなりません。

11 だれも、すでに据えられている土台以外の物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。

12 だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、

13 それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものかを試すからです。

14 だれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。

15 だれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、その人自身は火の中をくぐるようにして助かります。

16 あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか。

17 もし、だれかが神の宮を壊すなら、神がその人を滅ぼされます。神の宮は聖なるものだからです。あなたがたは、その宮です。

はじめに

先週はあかし礼拝でしたからコリントの手紙から離れました。今日は先々週の続きとなる 3:10-17 より、教会の土台とその上に建てる建物について思い巡らします。先々週は「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」と、教会は神さまが育ててくださるものであることを学びました。これはコリント教会に分裂がありパウロやアポロの功績に人々の目が向けられていましたので、それを是正するためでした。

続いてパウロは教会を建築家にたとえて説明しているのが今日の箇所です。建物を建てる時の土台とその上の建築物の関係から教会とは何かを説明しています。

1. イエス・キリストという土台

パウロには、自分は教会の開拓者であり、教会の土台を据えた者という自覚があります。それは決して自負ではありません。神さまの恵みによってさせて頂いたという謙遜をもってのことです。使徒の働きの記録を見ると、パウロは短期間に地域を巡回しながら教会を生み出していきましたが、コリントにだけは一年半滞在して教会の建て上げにあたっています。コリントでの福音宣教は最初から多難でした。イエス・キリストを伝えようと人々は早速反対しパウロを口汚くののしりました。パウロは「あなたがたの血は、あなたがたの頭上に降りかかれ。私には責任がない。今から私は異邦人のところに行く。」(使徒 18:6) とさじを投げようとしてました。すると主は幻でパウロに「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」(使徒 18:9, 10) と告げられ、それでパウロは一年半腰を据えて宣教にあたったのでした。

長くその地に留まって宣教したこともあり、折角苦労して建てられた教会が、分裂分派でグラグラしているというニュースを聞いて、パウロはどんなにか心配だったことでしょう。教会の建設者として「私は、自分に与えられた神の恵みによって、賢い建築家のように土台を据えました。…その土台とはイエス・キリストです。」(10, 11 節) と教会の土台はイエス・キリストであることを確認しています。私たちの教会は中古住宅をリフォームして使っていますので、よく建物の外壁などにある定礎板は見当たりません。しかし教会の土台はキリストであることを証するために、礼拝堂の下に定礎板が埋められています。またあるクリスチャンの方が、アパート経営をすることになり、起工式を行った際に聖書を埋めて神さまの祝福を祈ったことがありま

す。定礎板を設置したり、聖書を埋めるということは単なるセレモニーではありません。信仰告白なのです。

イエスさまも「わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」(マタイ 16:18)と述べられ、ペテロの「あなたは生ける神の子キリストです」という信仰告白の上に教会を建てますと仰いました。私たちの教会も愛する兄弟姉妹の「イエスさまは主です」という信仰告白の上に建てられているのです。そしてパウロはその土台を変えてはならないと強く主張します。土台がイエス・キリストであることを別の表現で言うと、教会の頭はイエス・キリストだということです。牧師も使徒も頭であるキリストに仕える者であって、人が頭を越えてしまったらそれは教会ではなくなってしまいます。一般の方は、教会の概観を見て判断なさいますが、外観が教会を決めるのではなく、一人一人の信仰告白が教会であるかどうかを決めるのです。

2. 建物の素材は何か

さて、教会の土台を確認したので、今度はその上にどんな建物を建てたら良いのでしょうか。パウロは「だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、それぞれの働きは明らかになります。」(12, 13)と述べていますが、なぜ材料の話をしたのでしょうか。それは、イエスさまを主と告白する信仰告白が健全なものであり、実質を伴っている必要があるからです。それは火による耐火試験のようなものだと言います。火によるテストによって建物が残ればそれは報いを受けるけれども、焼けてしまえば損害を受けると。つまり、信仰の迫害や試練によって、または最後の審判によって信仰者の実質が問われ、その時に耐え得る本物志向であることが大切なのです。

中にはイエスさまを信じてもすぐに信仰から離れてしまうケースもあると聞きます。折角信仰をいただいたのですから、最後まで信仰をもって歩むこ

とができるように願われます。イエスさまを救い主として信じる過程で、しっかりとした悔い改めを経ず教会に迎えることはないだろうかと考えさせられました。牧師にとって、今年の受洗者は何名とか、礼拝出席者は何名とかいった数字は、時に間違った方向に導くこともあり得ます。数で信仰や教勢を計る危険性を持っているからです。そうすると勢い数を増すために、信仰の原点が明確でないのに教会員として迎え、結果的に教会から去ってしまう方が起きないとも限りません。私たちは教会にたくさんの方が来られ受洗される方が起こされるように願います。しかし、それは明確な悔い改めと信仰の結果であり、結果を出すことが目的になってしまったら、教会の実質は失われて行ってしまいます。そのような教会建設とならないように自戒を込めて奉仕させて頂きたいと願っています。信仰を持っても様々な戦いがあります。しかし主イエスさまから離れないで歩むお互いでありたく願います。

3. 聖霊の宮である教会

そのように信仰の迫害や試練にも耐え得るしっかりした建物を築き上げていくために何が必要なかを最後に見て締め括ります。その鍵は 16, 17 節にあります。「あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか。もし、だれかが神の宮を壊すなら、神がその人を滅ぼされます。神の宮は聖なるものだからです。あなたがたは、その宮です。」

人が罪を悔い改めてイエスさまを救い主として信じたときに、聖霊なる神さまは一人一人の内に住んでくださいます。聖霊を宿す一人一人が集められた教会も、そこに聖霊がおられることは当然です。事実、教会は聖霊の宮であり、信仰者はその宮の一員であるとともに宮自身でもあるのです。聖霊なる神さまが信仰者一人一人の信仰と歩みを守り導いてくださっているのであり、その共同体である教会を守り導いてくださっているのです。霊の目を開いて、一人一人の信仰者の内におられる聖霊を意識しましょう。教会の中におられる聖霊を意識しましょう。

具体的にはキリストの愛をもって一人一人をこの場所に迎え、互いに愛し合うこと、互いに支え合うことを学ばせて頂きたいと願っています。教会の営みの中で聖霊の臨在を一番感じられる場所は礼拝の場です。ですから、礼拝に来られた一人一人をわが家に帰って来たような安らぎの中で心から歓迎しましょう。そのような雰囲気の中で聖霊の臨在を感じて頂ける教会でありたいです。疲れた心が癒され、重い荷物を降ろし、いろいろあるけれどまた新しい一週を始められることを感謝して喜んで礼拝の場を立ち上がることができるなら、それは聖霊の働きに他なりません。また、それは何も教会に限ったことではありません。「あなたがたは、その宮です。」(17 節)と一人一人が聖霊の宮ですから、クリスチャンが一人でも存在するなら、その場に聖霊がおられるのです。クリスチャンの周りには聖霊の香りが漂っているのですから、家庭や職場や学校や地域の中に聖霊の香りが漂うのは必然のことです。その心地良い香りに周りの人の心が癒されることを目指して、日々置かれた場所で聖霊の器として歩んで参りましょう。

まとめ

教会は建物が外観で判断されるものではありません。聖霊なる神さまが臨在される場所であるかどうか、それによって教会の真価が問われるのです。キリストを土台として、その上にしっかりした信仰を築き上げていくなら、試練や問題にも耐え得るのであり、神さまの評価にも耐え得るものとなります。そして、私たち一人一人も聖霊なる神の宮であることを覚え、置かれた場所で聖霊の香りは放ちながら歩んで行きましょう。今週の歩みが祝福されますようにお祈りいたします。